

# 世界社会フォーラムにおける組織と戦略<sup>1</sup>

## Organization and Strategies of the World Social Forum

著者：Jin-Sang Jeong (Gyeongsang National University)

翻訳：李 惠珍 (イ ヘジン)

抄録

世界社会フォーラムは何よりも資本の新自由主義的グローバル化に対する全世界の社会運動の国際的な対応である。資本主義的グローバル化により現れる挑戦、すなわち制裁を受けることのない投機的な金融市場、第3世界における巨大な負債と貧困、環境破壊、生態系危機などは、地球規模からの解決を求めている。世界社会フォーラムはこのような時代の要求に対する社会運動の国際的な対応である。本稿は、世界社会フォーラムを1つの運動としてとらえ、組織を取り巻くいくつかの争点と戦略の変化に焦点を合わせて分析する。世界社会フォーラムの組織をめぐる主要な争点としては、フォーラムを空間としてとらえるべきか、運動としてとらえるべきかという組織形式に関する争点、フォーラムのプロセスを実質的につかさどる組織委員会と国際委員会の機能と役割をめぐる争点、政党の参加問題を中心とする参加範囲をめぐる争点がある。世界社会フォーラムは枠組みが確定していない開かれた空間であるために、参加者が作っていく無定形的な運動である。よって、世界社会フォーラムの戦略も参加者の意思によって多様な形で表れる。実際にこれまでの世界社会フォーラムは、様々な形態の進行方式を試みてきたし、開催場所や時期も変わってきた。このような変化は、基本的に参加者の意思が反映されたものであり、今後とも変化の可能性は開かれている。本稿では、世界社会フォーラムの主な行事であるワークショップの組織方式の変化、フォーラムの世界的な拡散、世界社会運動総会とグローバルな国際行動を中心に、これまでの世界社会フォーラムにおける戦略の変化を考察した。

**Keyword**：世界社会フォーラム、オルター・グローバ化運動、国際主義、社会運動、社会運動の組織、社会運動の組織、社会運動の戦略

---

<sup>1</sup> 本論文は、2007年韓国研究財団重点研究所課題支援（KRF2007-411-J04602）による研究成果である。本論文の初稿は、2009年10月31日に批判社会学大会で発表した。Mi-Gyoung Ryu氏からは有益な論評をいただいた。記して感謝したい。本論文は韓国の<マルクス主義研究>2010年夏号（第7巻2号）に掲載予定であることを翻訳したものである。

## 1. はじめに

21世紀とともに始まった世界社会フォーラム (World Social Forum) が今年で9回目を迎えた。世界社会フォーラムは、最初は新自由主義的グローバル化という資本の全地球的な支配の象徴となった世界経済フォーラム (World Economic Forum) に対抗する議論の場として始まった。しかし、回を重ねるにつれ規模が大きくなっただけでなく、内容においても変化し、「運動たちの運動 (movement of movements)」という表現で表れるように、地球的な運動として定着した。

世界社会フォーラムは2001年にブラジルのポルト・アレグレで第1回フォーラムが開催されてから、2002年、2003年、2005年に同じところで開催されており、2004年はインドのムンバイ、2006年は多中心型フォーラムとしてアフリカ・マリのバマコ、ベネズエラのカラカス、パキスタンのカラチで、2007年はケニアのナイロビで、そして2009年はブラジルのベレンで開催された。フォーラムが開かれなかった2008年には世界社会フォーラムの企画のもと「グローバル行動日」 (Global Action Day) が行われており、2010年には世界各地で分散的に開催される予定であり、2011年にはアフリカ・セネガルのダカールで第9回世界社会フォーラムが予定されている。

新自由主義的グローバル化に抵抗する社会運動と闘争は1980年代から現れはじめ、ここ20年間その性格が変化してきた。先進資本主義国家の場合に資本の新自由主義戦略は、最初はケインズ主義時代に形成された社会経済的条件を反映する社会的主体の抵抗を受けた。このような闘争は既存の政治的・組織的想像力に基づき、主に新自由主義的政策により脅威を受ける労働者の権利と社会保障を防衛する性格をもっていた。しかし、1990年代に入りケインズ主義の時代の権利と社会保障を防衛する闘争とともに、まだ萌芽的ではあるが新しい政治的想像力と組織的連帯が現れはじめた。したがって、1980年代以降新自由主義的ヘゲモニーが強化され、労働者の権利と社会保障が縮小されてきたこの20年間で、単に労働階級の敗北であるとは規定できない (De Angelis, 2000)。この時期は他方では新自由主義的グローバル化に対抗する多様な新しい主体とラジカルな主張が再構成される国際的連帯が形成される次期でもあったのである。<sup>2</sup>

新しい国際的な連帯が可視化したのは、NAFTA (北米自由貿易協定: North American Free Trade Agreement) に反対する闘争であろう。1994年にNAFTAが締結される前の数年間行われた反NAFTA闘争は、多様な運動が結集するきっかけとなり、アメリカの労組幹部がアメリカ政府の外交政策に対する支持を初めて撤回したきっかけともなった (De Angelis, 2000)。

---

<sup>2</sup> 新自由主義的グローバル化に抵抗するいくつかの運動のなかで世界社会フォーラムという大規模な国際的連帯運動が登場するには、4つの重要な流れが指摘できる。①IMF, WTOといった国際機構に抵抗する第三世界の抵抗、②欧米資本主義社会の市民運動がとりはじめたトランスナショナル的ネットワークとグローバルな動員戦略、③国連会議に対する不満をオルタナティブな会議で代替しようとした一部のNGO、④トランスナショナル的ネットワークの形成において模範的事例を作った女性運動などである。(Smith et al., 2008:14-19)

NAFTA の発効とともに始まったメキシコのサパティスタ運動は、新しい国際的連帯を求めた。サパティスタネットワーク、特に人民の世界行動（Peoples Global Action）といわれる草の根運動組織は、世界社会フォーラムが出現するに必要な人的、組織的、思想的な下部構造を提供したといえる。これらの組織は 1990 年代の G8 サミットと、WTO(世界貿易機関：World Trade Organization)に反対する闘争の触媒となり、1999 年のシアトル抗議運動でピークを迎えた。

1999 年にシアトルで開催される予定であった WTO 閣僚会議を阻止するために、学生、組合員、教育者、保険福祉労働者、失業者、環境運動家、女性運動家、移民者など数万人の人々が会場の入り口の道路を封鎖した。このような大規模の抗議を予想していなかった警察が平和的な抗議デモに対して強引に対応したことで「シアトル闘争」ともいわれる事態が展開され、開会式中止に追い込み、WTO 閣僚会議を決裂させた。周知の通り、シアトル闘争の重要な組織的特徴は、公式的な指導部がなかった点である。単一の組織が抗議デモを代表したり、指導したりしたのではなく、価値やアイデンティティを共有した小規模の多様な集団が WTO 閣僚会議に抵抗する共同行為に参加し、統一性を形成したのである。また、シアトルでのグローバルな動員は、デモに参加した他の集団のやり方を学習し、相互理解する契機でもあった。シアトル闘争以降、このような抗議過程は、ワシントン（2000 年）、プラハ（2000 年）、ジェノア（2001 年）、バルセロナ（2002 年）へとつながり、国際機構の会議に反対する国際的デモにおいて繰り返し行われた。

シアトル闘争からはじまったこのようなグローバルな動員は、新自由主義的グローバル化に反対する国際的な連帯闘争の分水嶺をなす一方、世界社会フォーラムが組織される決定的なきっかけとなった。シアトル闘争以降の何回にもおよぶ国際会議反対闘争のなか、多くの活動家がグローバルな動員だけでは不十分であると考えた。単に反対するものに対して抵抗することも重要であるが、自らが何のために闘争すべきかに対する明確な展望を形成することがより重要であると考えはじめたのである。このような問題意識は、新自由主義的グローバル化に対する具体的な代案を模索するための第 1 回世界社会フォーラムの開催で現実化した。

世界社会フォーラムは何よりも資本の新自由主義的グローバル化に対する全世界の社会運動の国際的な対応である。「資本主義の危機に対する反撃」ではじまった新自由主義政策は、先進資本主義国家でケインズ主義時代に確保された雇用安定、社会福祉に対する攻撃を加える一方、第 3 世界に債務を媒介に構造調整を強いて、全世界の民衆を苦痛に晒している。資本の国際主義を規律する IMF(国際通貨基金：International Monetary Fund)、WTO、世界銀行といった世界機構は、国民国家の機能を制限するとともに、ナショナルなものと同グローバルなものの境界をあいまいにさせている。さらに、新自由主義的グローバル化がもたらす現在の問題はその範囲が国際的である。資本主義的なグローバル化に対する挑戦、すなわち制裁を受けることのない投機的金融市場、第三世界の巨大な負債と貧困、環境破壊、生態系危機などは、グローバルな規模での解決を求めている。世界社会フォーラムは

このような時代の要求に対する社会運動の国際的な対応である。

世界社会フォーラムは、範囲において全世界的であるだけでなく、これまで誰もを試みたことのない新しい形態の運動である。全世界的な運動として3回のインターナショナルや、国際的な連帯運動はあったが、世界社会フォーラムはこのような運動とはその形態が異なる。社会運動には一定の組織を備えた持続的な運動と、あることをきっかけで爆発する大衆運動があるが、世界社会フォーラムはこのような枠に当てはまらない新しい形態の運動である。したがって、従来の社会運動論や組織論の枠組みでは理解するのは困難である。「世界社会フォーラムプロセス」という表現は、世界社会フォーラムがもつこのような性格をうまく表すものであるといえる。

世界社会フォーラムは、その枠が確定していない開かれた空間であるので、参加者がつくっていく無定形的な運動である。ゆえに、世界社会フォーラムの戦略もまた、参加者の意思によって多様な形で表れる。実際にこれまでの世界社会フォーラムは、多様な形態の進行方式を試みており、開催の場所や時期も変わってきた。このような変化は基本的に参加者の意思が反映されたものであり、今後もこのような変化の可能性は開かれている。そこで、世界社会フォーラムを理解するためにはこれまでの戦略の変化を考察する必要がある。

本稿は、世界社会フォーラムの性格を組織と戦略という観点からアプローチする。韓国では、これまで世界社会フォーラムが開催される度に、参加者の感想という形式で「月刊社会運動」で紹介・評価されていた。しかし、世界社会フォーラムを本格的な取り扱った研究はほとんどない。<sup>3</sup> 本稿では、世界社会フォーラムを1つの運動としてとらえ、組織をめぐるいくつかの争点と戦略の変化に焦点を合わせる。

## 2. 世界社会フォーラムにおける組織をめぐる争点

### 1) 組織形式における性格：「空間」(space)か「運動」(movement)か

世界社会フォーラムは、憲章第1条に「運動」ではなく「空間」と規定している。

<sup>4</sup> 世界社会フォーラムが運動ではなく空間である理由は、共同の綱領がないだけでなく、

---

<sup>3</sup> 世界社会フォーラムを概括し、いくつかの困難を指摘した Suk-Ki Kong (2007年韓国社会学会、発表論文)がある。

<sup>4</sup> 世界社会フォーラムの憲章第1条は、「世界社会フォーラムは、新自由主義、資本とあらゆる形態の帝国主義の支配に反対し、人類、そして人類と地球の間に実りの多い関係を目指す地球社会を作り上げようとする市民社会の団体や運動が、熟慮した考え・アイデアの民主的な議論・提案の形成・経験の自由な共有・効果的な行動を連結させるための開かれた討論の場である」。また、憲章6章では、「世界社会フォーラムで開催されるミーティングは、1つの機構として世界社会フォーラムを代表するものではない。したがって、誰でもあっても、いかなる形態においてもフォーラムを代表し、フォーラム参加者全体の立場であると主張する立場を表す権利はない」としている。

([http://www.forumsocialmundial.org.br/mail.phd?id\\_menu=4&cd\\_language=2](http://www.forumsocialmundial.org.br/mail.phd?id_menu=4&cd_language=2))

闘争方針を決定する単位もない。また、公式的な代表や指導部がないためである。しかし、実際はすべての人がフォーラムを単なる空間であると考えているのではない。多くの人はフォーラムが「運動」の性格をもつ空間であると考えている。そのために、世界社会フォーラムの組織形式における性格をめぐる議論が創立当初から続いている。

運動と空間は完全に違うものであり、世界社会フォーラムは運動ではなく空間であるべきであると強く主張し、憲章を最も積極的に代弁する人が、世界社会フォーラムの主唱者の一人で影響力のある組織委員のフランシスコ・ウィタケル (Francisco Whitaker) である。彼は運動と空間、両者は共存できるものであり、対立的なものではないけれども、1つにはなれず、もしそうなったとすれば各々の機能を損なうと主張する。それは、運動と空間は、同一の一般的目的を目指すことはできるものの、各々は相違する特定の目的のために異なる方式で動くものであるからである。さらに、フォーラムを運動へと移行させることが新自由主義を克服し、もう一つの世界を作るという目標を達成するのによりよい戦略なのか、それともこれまでのようにフォーラムを開かれた空間として維持することがよりよい点についても、ウィタケルの立場ははっきりしている。彼は運動へと移行すれば、フォーラムのもつ開放性、自由、水平的な構造の力という強力な闘争手段をあきらめることになるので、フォーラムの目指す目標のためにはいかなる犠牲を払っても空間としてのフォーラムを維持すべきであるとする (Whitaker,2004:112)。

ウィタケルは運動としてフォーラムを位置づけるより、空間としてフォーラムがもつ利点を次のように指摘する (Whitaker,2004:112~117)。第一に、運動は一定の方向性をもつだけでなく、目標を達成するための戦略を規定し、行動プログラムを構成し、構成員に責任を課する。運動の組織的構造は、たとえ意思決定過程が民主主義的であっても、垂直的な構造になりかねない。そして運動の効果は、特定の目標を明示的にはっきり表現することで明らかになるために、時間的・空間的な境界が生じるものである。対して、空間は、水平的なもので持ち主のない広場と同様である。広場は一般的に開かれた空間で、それを使うことに興味のあるすべての人が集まることができる。広場は使用者がいかなる目的をもって利用するにしても、目的はまさに広場としてあることである。フォーラムは開かれた空間であるが、中立的な空間ではない。フォーラムは1つの特定な目標、すなわち可能な限り多くの個人や組織、運動に新自由主義に反対するために自由に集まり、相互の経験と闘争を学びあい共有しながら行動方針を議論できるようにする。そして、大規模の超国籍企業や金融的な利害が支配している現在のグローバル化を克服するための新しいネットワークと組織をつなぐ。

第2に、フォーラムはフォーラムに集まるすべての人の共通目標に資するように創出するための公の空間として水平的に機能するし、指導者やピラミッド型権力を認めない。それによって、フォーラムはもう1つの世界を構成するためのイノベーションが生まれる「アイデアの工場」または、インキュベーターとして稼働する。フォーラム自体は運動ではないが、多数の運動と闘争を可能にする。しかし、もしフォーラムが1つの新しい運動を標

傍すると、必然的に内部において分裂をもたらすこととなる。

第 3 に、フォーラムは単一の声で、声明を發表することはない。広場は自身が宣言しないことで、フォーラムの多様な参加者が様々な声をあげることができる。2003 年のポルト・アレグレのように「行動提案掲示板」を通して多様な意見が出されるのである。参加者がフォーラムで、フォーラムの名前で声明書を發表することを望むが、その効果よりは広場のもつ有効性を損なう恐れがある。

第 4 に、開かれた空間としてのフォーラムは運動とは違って多様性を尊重する。我々が作り上げようとするもう 1 つの世界は、多様性に対する尊重があるべきである。フォーラムは誰一人も 1 つの行動や提案が他のものより重要であると主張する権利はない。しかし、デモ行進や行事の順番などにおいては、誰を優先させるかに対して多様性の尊重の原則を損なう恐れがあるために、より一層議論されるべき問題である。

第 5 に、このような多様性の表出できる開かれた広場は、参加者に楽しさを与え、相互の責任性を高める。広場では多様なデモやパフォーマンスにより真のパーティが開かれ、誰もがいかなる制限を受けず参加できる。そして、組織委員会にミスがあれば、参加者自らが主体的に正すところは、広場のもつ利点をよく表すものである。

このようなウィタケルの主張は、世界社会フォーラムがはじまった当初から現在までフォーラムを推進する主流の見解として、憲章だけでなく実際においてもおおむね貫徹されている。しかし、フォーラム参加者のなかには、フォーラムが空間であると同時に行為者になることは決して両立不可能なものではなく、フォーラムが 1 つの行為者として宣言と行動を進めるべきであるとする人々も多い。このような圧力とともに、国際委員会の内部においても異議が継続的に提出されている。たとえば、2002 年 8 月にバンコク開かれた国際委員会でワルデン・ベリョ (Walden Bello) などは、委員会が WTO 反対闘争に世界的な参加を促すために公式的な宣言を發表すべきであると主張した。また、2003 年 1 月の国際委員会では諸議員がイラク戦争判定宣言文を發表すべきであると主張した。どちらも国際委員会がいかなる声明も出さないと決定したことで納まったが、今後もこのような論争は絶えないだろう (Teivainen, 2004:126)。

フォーラムの憲章に反しない形でありながら、政治的な沈黙を避ける方法としてフォーラム参加者が考えたのが、「世界社会運動総会」である。第 1 回世界社会フォーラムにおいていくつかの組織がフォーラムの空間を用いて、新自由主義的グローバル化に関する主要争点についての基本的な立場と活動リストを作ろうと「動員のための呼び掛け」(Call for Mobilization) を發表して以来、フォーラムの最終日の世界社会運動総会は慣例化した。また、世界社会フォーラムがより明確でかつ統一的な声を出すべきであるという参加者からの要求が高まっていくと、2005 年の世界社会フォーラムでは「G19」(Group of 19)といわれる著名な知識人が起草した声明書を「ポルト・アレグレ宣言」という名前で發表しており、2006 年の世界社会フォーラムではマリのバマコでより大きな規模の知識人の「バマコ宣言」を發表した (Smith et al., 2008:42)。

ウィタケルらは、社会運動総会と宣言発表に対してマスコミは、それらをフォーラムの半公式的な結論としてみなす恐れがあり、そのために内部における政治的な分裂が起こると批判したが（Whitaker,2004:116）、社会運動総会の組織者と宣言発表者は、フォーラムの名のもとにおいてではなく、単にフォーラムを用いるだけであると主張した。このような宣言は、たとえフォーラムの名のもとで発表したものではないが、それと同じような効果をもち得るために、フォーラムが憲章に規定したように単なる空間にとどまるのではないことを表すものであるといえる。

また、フォーラム行事を誰かが組織することとなるが、そこには一定の方向性が入り込むものである。世界社会フォーラム組織委員会または、国際委員会がフォーラム行事を組織する役割を担っているが、この点を考慮すると、フォーラムを単なる空間とみなすことはできない。さらに憲章は「新自由主義反対」と「オルターナティブなグローバル化」についての指向性をはっきりと表現している。そして、国際委員会は、当初には空間としてのフォーラムという原則に多少硬直的であったが、後ほど述べる通り 2005 年の第 5 回フォーラムでは新しい方法論を受け入れたり、2008 年には「グローバル行動日」を決め地球規模的な動員を試みたりするところからみられるように、柔軟な態度を見せている。

したがって、世界社会フォーラムが空間か、運動かという問題を選択の問題とみなし、理論的に論争するのは好ましくないように思われる。世界社会フォーラムの憲章で規定した通り本質的には空間であるのは確かであるが、実践的にはフォーラム空間のなかで多様な組織の様々な活動を通じて、そして国際委員会の柔軟な戦略を通じて 1 つの運動として発展しているのである。空間としてのフォーラムがもつ長所を活かしながら、どうやって新自由主義反対とオルターナティブなグローバル化というフォーラムの基本目標に近づける多様な戦略を駆使するかに焦点を当てるべきであろう。

## 2) 組織委員会と国際委員会をめぐる争点

世界社会フォーラムが空間であるとしても、誰かによって準備され、組織されなければならない。2001 年の第 1 回目のフォーラムの場合は、最初にフォーラム形式を提唱したブラジル組織委員会が主導的に行事を組織した。第 1 回世界社会フォーラムの直後、フォーラムを継続的な行事にすると決めたことで、フォーラムの内容に適合する国際委員会の必要性が提起され、2001 年 6 月に国際委員会（International Counsel）を結成し、毎年開催するフォーラムのテーマを決めるとともにプログラム構成・パネリスト招待・財源調達の役割を担うこととなった。国際委員会は、結成された当初はフォーラムを実質的に組織したブラジルの組織委員会に国際的な正当性を与えるほどの役割にとどまったが、後ほど世界社会フォーラムを実質的に運営する最高意思決定機構へ発展した。まず、国際委員会の組織発展過程をみよ。

1999 年のシアトル闘争を頂点に、資本の世界的な支配に抵抗する運動が高まったころ、ダボス世界経済フォーラムに対抗する世界市民社会の集まりが必要であるというアイデア

が反グローバル化運動の内部から提起された。2000年2月にこのような構想を初めて提案したのが、ブラジルのNGOであるCIVES（市民のためのブラジル起業家協会：Brazilian Business Association for Citizenship）のオデッド・グラジュウ（Oded Grajew）である。彼はブラジルのCBJP（ブラジル正義と平和委員会：Brazilian Justice & Peace Commission）の事務局長ウィタケルにその構想を伝え、ATTAC（市民を支援するために金融取引への課税を求めるアソシエーション：Association for the Taxation of financial Transactions for the Aid of Citizens）の代表であり、ル・モンド・ディプロマティークの編集長であるベルナル・カッセン（Bernard Cassen）がパリで会合し、フォーラムの可能性を打診する3つの事項に合意した。<sup>5</sup> 1) 南半球、ポルト・アレグレで開催する。2) 世界経済フォーラムに対抗し、世界社会フォーラムと称する。3) 象徴性がマスコミの関心をひけるように世界経済フォーラムが開催される時期に開く（Whitaker, 2000、Teivainen, 2004:123）。

このような構想はすぐ実行に移され、ブラジルの8つの団体<sup>6</sup>が集まり、組織委員会を構成することにし、ポルト・アレグレ市政府とリオグランデ・ド・スル州政府に協力を要請し、全面的な支援を得ることとなった。第一回世界社会フォーラムの準備や、フォーラムプロセスの公式的な意思決定はブラジル組織委員会により行われた。<sup>7</sup> このように最初の世界社会フォーラムが主にブラジル組織委員会やポルト・アレグレの地域政治の特徴により進められたために、他のトランスナショナル的な行事とは異なり、組織主体の面において強い地域的な性格をもつようになった。

第一回世界社会フォーラムが予想より成功を収めたことで、フォーラムを世界市民社会の行事を作るために国際委員会を構成すべきであるという議論が自然に出された。国際委員会は第1回フォーラムの最後の日に発議され、2001年6月サンパウロ会議で結成された。国際委員会の結成において中心となったのも、ブラジル組織委員会であった。組織委員会はサンパウロ会議に招待する名簿を作成し、各国の団体に連絡し、会議を招集した。最初はプロセスについて承知しており、ブラジル組織委員会と関係している団体に限定されていたために、国際委員会は順調に構成された。

2001年6月サンパウロで開催された国際委員会は、規約の草案を制定したが、そこで国

---

<sup>5</sup> 「ポルト・アレグレ宣言」は、世界社会フォーラムがダボス世界経済フォーラムに対抗する用語であるのと同様に、「ワシントンコンセンサス」に対応する概念である。この声明は「G19」という別称が与えられた19人の著名人が起草したもので、新自由主義的グローバル化と戦争を克服するための12の議題を述べている。

<sup>6</sup> ブラジルの組織委員会を構成した8つの団体は、ABONC(ブラジル NGO 連合：Brazilian Association of Non-Governmental Organization)、ATTAC、CBJP、CIVES、CUT（中央統一労働組合：Brazilian Workers Central Union）、IBASE(ブラジル社会経済分析研究所：Brazilian Institute of Social & Economic Analysis)、CJG（グローバル正義のためのセンター：Centre for Global Justice)、MST（土地なし農民運動：Landless Rural Workers Movement）である。うち、CUTとMSTは大規模な大衆組織であり、他は小規模の市民社会団体である。しかし、財源においてはIBASEの役割が大きかったという（Teivainen,2004:123）

<sup>7</sup> ポルト・アレグレとリオグランデ地方政府は、当時ブラジル労働者党が執権しており、特にポルト・アレグレの場合は参加型予算など民主主義的な地方政府として名高かった。

際委員会が世界社会フォーラムプロセスを持続的に進める「永久的な機構」(permanent body)として位置づけられ、「フォーラムの政策方針や戦略の方法を決定する役割」を担うことが規定された。ただ、「国家組織委員会（特にブラジル組織委員会）とともに組織者・促進者」として機能すると条件付けられていた。しかし、憲章の精神により国際委員会は権力構造における権威的機構でも官僚的な機構でもないし、票決方式ではなく合意制で運営されるとした。<sup>8</sup> また、代表性も世界社会フォーラムをグローバルなレベルへ拡大していく能力に起因するとし、委員が地域的に偏る問題を避けようとした。<sup>9</sup>

規約上では、国際委員会が世界社会フォーラムを組織する最高意思決定機構と規定されていたが、2002～2003年までもブラジル組織委員会が実質的にフォーラムを組織する役割を担っていた。このように、当初の何年間は組織委員会に国際的正統性を与える役割が大きく、まだ組織委員会と国際委員会の関係があいまいなまま残っていた。フォーラムの相次ぐ成功により世界的な関心が広がったことで、自然に国際委員会の実質的な地位と代表制の問題が議論の中心問題として浮上した。こうした問題を集中的に取り扱った2003年6月アメリカ・マイアミ国際委員会会議は1つの転機となった。

この会議では、国際委員会の構成、地位、役割を規定する規約案をめぐって活発な議論が繰り広げられ、国際委員会のおおよその方向性が決まった。<sup>10</sup> 主要な論点は3つであった。第1に、国際委員会が実質的な役割を果たすために6つの小委員会を構成すること、第2に、地域と部門の代表性を有することができるように新しい会員団体を加入させること、第3に、国際委員会と組織委員会（事務局）の関係を明確にすること、であった。

国際委員会が6つの小委員会(commission)を組織したことで、1年に2、3回会議を開くだけの名目上の機構から脱皮し、実質的に機能できる組織的な措置を設けた点は、重要な前進であった。6つの小委員会は、情勢分析と戦略を議論する戦略小委員会(Strategies)、世界社会フォーラムで取り扱うテーマと方向を提示するテーマ及び内容小委員会(Theme and Content)、世界社会フォーラムのイベントをシステム化する方法論小委員会(Methodology)、フォーラムの拡散のために努める拡散委員会(Expansion)、世界社会フォーラムの内外のコミュニケーションの体制を構築するコミュニケーション小委員会(Communication)、世界社会フォーラムの安定的な財政調達方案を模索する財政小委員会(Finances)である。国際委員会所属団体は、必ず1つ以上の委員会で活動すると規定された。この小委員会は、意思決定機構ではないために、国際委員会所属団体ではない団体も参観者として参加でき、担当分野についての案をつくり、国際委員会に提出する作業を担当することとした。以来、

---

<sup>8</sup> 規約草案の全文は世界社会フォーラムのホームページで見ることができる。

([http://www3.forumsocialmundial.org.br/main.php?id\\_menu=4\\_2\\_2\\_1&cd\\_language=2](http://www3.forumsocialmundial.org.br/main.php?id_menu=4_2_2_1&cd_language=2))

<sup>9</sup> 国際委員会は2003年2月から113団体によって構成された。ここには、8つのブラジル組織委員会がすべて含まれた。大半の国際委員会の議員がラテンアメリカや西ヨーロッパ出身によって構成されたために、後ほど地域的な代表性の問題がもたらされた。(Teivainen, 2004:124)

<sup>10</sup> [http://www.forumsocialmundial.org.br/dinamic.php?pagina=ci\\_regras\\_miami\\_ing](http://www.forumsocialmundial.org.br/dinamic.php?pagina=ci_regras_miami_ing)

国際委員会は、会議のない間は、各小委員会の活動報告と議論を中心に進められている。

次に、国際委員会に新しい会員団体を加入させる原則と方向を決めたのは、これまで国際委員会の地域的・部門的な代表制に対する問題提起に対する対応であった。<sup>11</sup> 規約には新しい会員団体として加入できる条件を規定するにとどまったが、性別・地域別・部門別のバランスを成し、国際委員会が代表性を有することができるようにするという原則を確認し、新しい会員団体を加入させるための具体的な任務を拡散小委員会に与えた。以来、拡散小委員会は現在の国際委員会の構成を分析し、性・地域・部門別の不均衡問題を分析し、改善方案を考察した。<sup>12</sup> 2008年8月現在159団体が加入している国際委員会は、ある程度は不均衡が改善されたが、依然として性・地域的不均衡は残っている。<sup>13</sup> しかし、国際委員会が継続的に不均衡問題を克服しようと努力してきた結果、当初の不均衡問題による代表性に対する問題提起はある程度脱したように思われる。また、国際委員会に加入した団体の場合にも、1年に2、3回場所を変えて開かれる会議に参加する団体は3分の1程度にとどまっており、統計的な代表性の側面は、献身的な活動により多少相殺される面もある。<sup>14</sup>

---

<sup>11</sup> 世界社会フォーラムの主唱者の1人であるウィタケルは、「現在の組織委員会が、参加者の影響力や政治的な指向の代表性がないとの指摘があるが、このような指摘はフォーラムであれば正しいが、空間であるとすれば政治的な指向性を表さないために不適切である」

(Whitaker, 2004:119)と抗弁するが、国際委員会はフォーラム参加者の代表性に対する要求を黙殺することはできなかった。しかし、彼が「空間としてのフォーラムの組織委員会の構成は、行事の多様性を表現し、反映する多様性をもつことは好ましい。しかし、運動組織の重要性によって比例的に多様性を有することを意味するのではない。なぜなら、このような組織と運動は支持を受けるためにフォーラムに来るのではないためである。委員会の多様性よりもっと重要なのは、委員会を構成する人々と組織に対する信頼の問題である。この点により、組織委や国際委に必要な概念は促進者 facilitator である」とした指摘は聞くに値する。実際にも国際委員会は積極的な参加者により主導されているのが現実である。

<sup>12</sup> 新しい会員団体の加入問題は国際委員会の会議毎に重要な報告事項であるが、2005年6月バルセロナ会議では拡大小委員会が現在の国際委員会の地域・部門別構成を分析して報告した。報告によれば、地域をみると国際委員会の加入団体のうちヨーロッパ33.3%、ラテンアメリカ33.3%、アフリカ6.3%、アジア9.4%、オセアニア1.0%、北アメリカ13.5%、中東アジア2.1%、アラブ1.0%で、ヨーロッパとラテンアメリカに偏っているのがわかる。部門別では、労働組合13.2%、経済正義（発展、外債、貿易、社会経済的平等）33.3%、女性8.8%、平和3.5%、マスメディア5.3%、環境4.4%、民主化（民主主義市民権、参加、反人種主義）6.1%、人権11.4%、教育3.5%、研究2.5%、青年0.9%、先住民1.8%、性的マイノリティ1.8%、世界教会主義1.8%、地球2.6%で構成されている。(http://www.forumsocialmundial.org.br/download/relat\_ci\_bcn2005\_ing\_mix.pdf)

<sup>13</sup> 国際委員会の会員団体は2003年2月113団体だったが、2005年4月130団体、2008年159団体へと増え、各地域及びテーマフォーラムは団体ではないという理由で参観団体として参加している。韓国では、KOPA（投資協定WTO反対国民行動）と民主労総が加入しているが、参席率は低い。(http://www.forumsocialmundial.org.br)

<sup>14</sup> 毎回、国際委員会の会議報告書では、参加者の名簿を公開するが、40～60人程度の委員が参加している。距離や費用の問題を緩和するために、会議が北半球で開催されるときは北半球の参加団体が「連帯基金」を出し、南半球の参加団体に補助するなど参加率を高め

第3に、規約では国際委員会と世界社会フォーラム事務局の関係について、「国際委員会は世界社会フォーラムプロセスに関する政治的決定権をもつ」と決めており、「世界社会フォーラム事務局はフォーラムプロセスを促進するための技術的な機構である」とし、国際委員会が世界社会フォーラムの最高意思決定機構としてはっきり位置づけられた。国際委員会はフォーラムプロセスの戦略的方法を設定する権限をもつ一方、事務局は1つのイベントとして世界社会フォーラムの内容や形式を担当するということである。<sup>15</sup> これにより、これまで議論されてきた組織委員会と国際委員会とのあいまいな関係が整理された。また、ブラジル組織委員会が担当していた事務局を様々な国の構成員へ国際化することにした。

このように、2003年6月マイアミ会議をきっかけに国際委員会が世界社会フォーラムプロセスを決定する最高意思決定機構としてしっかり落ち着いた。国際委員会の立場が確実になったことで、その構成と運営方式、役割について多くの議論がある。まず、国際委員会の構成が地域（または国家）、性、人種に偏っているという指摘については、上記した通り、国際委員会自らも拡散小委員会を通じて対策を考えてきた。しかし、それが現在の世界各国の社会運動の力量を反映することができないために、早期に解決されるとは思えない。次に、国際委員会の合意制による意思決定方式が逆に民主的意思決定を妨げるとの批判がある。合意制による意思決定方式は、「資源と人脈がある内部の人々」が支配する恐れがあるという（Callinicos,2007）。しかし、現在の国際委員会の構成が世界の社会運動の形式的な代表制をもっていないだけでなく、普通の運動組織のように規律を強制することができず、それにより動員の問題が生じかねないために、票決による意思決定の方が逆に危険である。ただ、会議において議題が少数により既に決められ、十分な議論が行われていないとの批判は正しいといえる。最後に、国際委員会が重要な契機に世界社会フォーラムの名前で声明を発表したりする行為者としての役割を果たすべきであるという要求がある。この問題は、世界社会フォーラムが空間か、運動かという問題と直結するもので、強直的なアプローチよりは、柔軟なアプローチが求められる。世界社会フォーラムがまさに空間であり、国際委員会は代表性をもたないために、原則的にはこうした行為が問題を起こす可能性はある。しかし、世界社会フォーラムに参加する圧倒的な多数の団体が同意できる内容であれば、原則にとらわれて回避することも好ましい態度ではないだろう。

### 3) 参加範囲：政党および武装団体の参加問題

次に、政党と政府および軍事組織の参加制限の問題がある。世界社会フォーラム憲章第9

---

る努力をしているが、参加率は高くない。

<sup>15</sup> 事務局の役割も5つに明示しているが、1) 地域及びテーマフォーラムを奨励し、支援すること、2) 国際委員会の会議組織を円滑にすること、3) 国際委員会のコミュニケーションを保障すること、4) 世界社会フォーラムのプロセスの歴史的な記録を組織すること、5) 世界社会フォーラムのプロセスのための財源を調達し、支援すること、である。

([http://www2.forumsocialmundial.org.br/main.php?id\\_menu=4\\_2\\_2\\_1&cd\\_language=2](http://www2.forumsocialmundial.org.br/main.php?id_menu=4_2_2_1&cd_language=2))

条には、多元主義と多様性に関わった空間であることを強調しながらも、「政党の代表と軍事組織は参加できない」と明示している。ただ、「この憲章を受け入れる政府指導者や、議員は個人の資格でフォーラムに招待されうる」と規定している。<sup>16</sup>世界社会フォーラムが政党の参加を排除しているには、初期にフォーラムを主導していた勢力の既存の政党政治に対する考えが反映されていると思われる。水平的な連帯に基づく市民社会の表現であると自らを規定している世界社会フォーラムが、垂直的な組織構造をもつ政党や政府に対する拒否感をもっている点 (Whitaker,2006:66)、政党や政府が執権のための選挙目的でオルタナティブなグローバル化運動を利用する恐れがある点 (Della Porta et al., 2006:212)、第2次世界大戦以降のヨーロッパ諸国は左派政党が執権したが、新自由主義的グローバル化以降の市場のパワーやIMF独裁に無力であった点(Klein,2002:21)などが重要な考慮事項として働いたであろう。

しかし、政党の参加問題をめぐって世界社会フォーラム国際委員会での会議においても激しい議論が繰り広げられた。たとえば、2002年8月バンコク国際委員会でイタリア委員がヨーロッパ社会フォーラムに政党を公式的に招待するというと、ブラジル委員は憲章の精神に基づき批判した。これに対して、イタリア委員はブラジル組織委員会とブラジル労働者党との関係を指摘し、偽善的であると反論した (Teivainen,2004:127)。<sup>17</sup>

世界社会フォーラムの政党参加禁止にも関わらず、政党または政府とフォーラムとの関係が流動的であるために、2004年ムンバイと、2007年ナイロビフォーラムを除けば、第1回世界社会フォーラムから実質的には政党または政府とフォーラムは緊密な関連があった。特に、ポルト・アレグレで開かれた4回の世界社会フォーラムではブラジル労働者党と緊密につながっている政府の支援を受けており、2006年カラカス世界社会フォーラムではチャベス政府が直接国際青少年キャンプを作るなど全面的に支援した。事実上フォーラムの規模が大きくなるにつれ、政府の物質的な支援の必要性が段々大きくなった。2002年世界社会フォーラムには、フランス政府の閣僚が多数参加しており、ベルギーの総理が組織委員会により参加が拒否された (Teivainen,2004:127)。第1回世界社会フォーラムの際には、組織委員会が武装団体であるコロンビア革命軍 (Revolutionary Armed Forces of Colombia: FARC) とキューバ政府の参加を不許可したが、ブラジルのルイス・イナシオ・ルーラ・ダ・シルヴァ (Luiz Inácio "Lula" da Silva) の参加は承認した。第3回会議ではルーラが開会式で大統領として発言したことは多くの議論を引き起こした (So-Hee Jeon,2003)。2003年には10万人あまりの聴衆が集まったなかで進められたブラジルのルーラ大統領の演説と、2005年大きな人気を集めたベネズエラのウゴ・ラファエル・チャベス・フリラス (Hugo Rafael

---

<sup>16</sup> [http://www.forumsocialmundial.org.br/main.phd?id\\_menu=4&cd\\_language=2](http://www.forumsocialmundial.org.br/main.phd?id_menu=4&cd_language=2)

<sup>17</sup> こうした論争にも関わらず、ヨーロッパ社会フォーラムでは2002年ウィーン予備会議において政党が各国の社会運動を公式的に代表できるようにした。ただ、政党の役人と党員はフォーラムに個人資格で登録するガイドラインを作り、政党の参加を認め、2004年ロンドンで開催された第3回ヨーロッパ社会フォーラム以降には政党の参加制限を廃止した (Smith et al., 2008:68-69)。

Chávez Frías) 大統領の演説で、世界社会フォーラム憲章とは関係ない多数のフォーラム参加者の政党参加排除に対する態度が現れた。2009 年ベレン世界社会フォーラムにはベネズエラのチャベス大統領、ボリビアのファン・エボ・モラレス・アイマ (Juan Evo Morales Aima) 大統領、エクアドルのラファエル・ビンセンテ・コレア・デルガード (Rafael Vicente Correa Delgado) 大統領、パラグアイのフェルナンド・アルミッド・ルゴ・メンデス (Fernando Armindo Lugo Méndez) 大統領など、南米の左派首脳が参加し注目された。

こうした事情を反映し、政党参加排除の原則を再考すべきであるとの主張が多くの活動家から提案された。2004 年ムンバイで開催された第 4 回世界社会フォーラムでは「政党と社会運動」というパネルを組織し、この問題を公開的に議論した。このパネルには、ブラジル労働者党、インド共産党 (Communist Party of India: CPI)、イタリア共産主義再建党 (Partito della Rifondazione Comunista: PRC)、ヨーロッパ緑の党 (European Green Party) など、政党活動家の多くが参加し、政党が世界社会フォーラムとどのような関係を形成すべきかについて議論された。これらの主張は、社会運動が多様なテーマとイシューを提起し、それを中心に大衆を動員することは、社会運動の役割であり高く評価されるものである。しかし、社会運動の主張と要求が求心性をもち、現在の政治と国際情勢に直接的に影響のある勢力として登場するためには、政党のような政治的な枠組みが必要であり、政党と社会運動が友好的なパートナーシップを形成できるようにすべきであるという (Ji-Young Jung, 2004)。

こうした論争にも関わらず世界社会フォーラム国際委員会は、政党や政府の代表が参加する場合は、「招待」という方式を用いるとか、「円卓会議」という新しい形式の議論の場を設けて、参加が禁止されている政党や機構の代表が参加できるようにするなどの方式で、憲章で規定している政党参加禁止の原則を堅持している。

しかし、各国の状況によって、市民社会または社会運動組織と政党を厳密に区分することは困難である。ヨーロッパの場合は社会民主党が執権している場合もあるが、社会運動組織と密接に関連している左派政党も相当数ある。南米の場合は、アルゼンチン、ブラジル、ベネズエラ、チリ、ボリビアのように、多くの活動家は、浮上している左派政党を新自由主義的グローバル化の克服を可能にする社会変動の動力としてみなしている。新自由主義的グローバル化に反対し、オルターナティブな世界を目指す勢力であれば、参加自体を制限することは憲章 1 条に示された世界社会フォーラムの空間としての目標に妨げとして働くかもしれない。これに関連して、「グローバル民主化のためのネットワーク研究所」のトーマスポニア (Thomas Ponniah) は、社会運動は政党と違ってイラク戦争に反対する、歴史上もっとも大きなデモを動員できるが、スペイン政府とは違ってイラクで自国の軍隊を撤収させることはできないと指摘した (Smith et al, 2008:73)。また、世界社会フォーラムの主唱者であるカセンは、「選ばれた代表と、社会運動が新自由主義に抵抗するという同一のグローバルな目標を共有していれば、我々は彼らとの間の壁を維持するという浪費をする余裕はない。関与している政党の自律性を尊重しながら、相互協力することがフォーラ

ムの目標にならなければならない」と主張した（Cassen, 2006:83）。世界社会フォーラムが10年の経験を通じて、もし政党や武装団体が参加したとしてもフォーラム自体を彼らの思い通り動かすことができないという点が確認されているだけであって、最初の参加禁止規定にこだわる必要はないだろう。

### 3. 世界社会フォーラムの多様な戦略

#### 1) 新自由主義反対とオルターナティブな世界のための議論

世界社会フォーラムの重要なイベントは各種の討論会である。討論会は組織委員会が企画する大規模なコンファレンスと、フォーラム参加者が自発的に構成する小規模なセミナー及びワークショップがある。大規模な企画コンファレンスはフォーラムが開かれる当時の情勢を反映し、「新自由主義反対」というフォーラムの基本精神にあうテーマで会議を組織し、ここには数百・数千人が参加する。小規模会議は多様な団体が自らの関心テーマを発表し、討論したり、闘争経験・事例を紹介したりする集まりで、数十人が参加する。他にフォーラム期間中は、公演や展示会といった文化イベントも行われる。

世界社会フォーラムの討論会議のもっとも重要な特徴は、規模の大きさと種類の多様性であろう。フォーラムが最高潮に達した2005年第5回ポルト・アレグレ世界社会フォーラムの場合は、約2500の討論会が組織され、135カ国から15,500人が参加し、年間50万人がイベント場を訪れた。〈表1〉の通り、世界社会フォーラムの規模は2005年まで会議の数や参加者が飛躍的に増えた。それは、新自由主義的グローバル化に抵抗する世界各国の社会運動の国際的なコミュニケーションと連帯が拡大し、世界社会フォーラムが成功していることを表している。

〈表1〉年度別世界社会フォーラムの会議及び参加者数

開催年度	場所	企画コンファレンス	セミナー・ワークショップ・証言など	参加国数	参加者	外国人参加者
2001	ポルト・アレグレ	16	444	117	4,700	1,504
2002	ポルト・アレグレ	27	622	123	12,274	5,427
2003	ポルト・アレグレ	10	1,348	130	20,126	7,717
2004	ムンバイ	13	1,200	117	74,126	
2005	ポルト・アレグレ	0	2,500	135	155,000	
2006	ナイロビ	0	1,200	110	66,000	
2007	ベレン	0	2,600	142	130,000	

出典：www.forumsocialmundial.org.br

注：「多中心型フォーラム」が開かれた2006年と「グローバル行動日」が開かれた2008年は除く

世界社会フォーラムで開かれる各種の討論会のテーマは新自由主義的資本主義に反対し、オルターナティブな世界の模索に関連する多様な分野のテーマである。第1回世界社会フォーラムの企画テーマをみると、1) 富の生産と社会的な再生産、2) 富と持続可能性に関するアプローチ、3) 市民社会と公共領域、4) 民主主義と市民権力、4つのテーマで構成されており、第2回の場合も同様であった。第3回世界社会フォーラムにおいてはテーマを細分化し、1) 民主的な持続可能な発展、2) 原則と価値、人権、多様性および平等、3) メディア、文化および対抗ヘゲモニー、4) 政治権力、市民社会および民主主義、5) 民主的秩序、軍事主義に対する闘争および平和の促進と、5つのテーマで構成された。ムンバイで開催された第4回フォーラムでは、4つの領域別テーマとともに横断テーマとして、1) 帝国主義的グローバル化、2) 家父長主義、3) カースト主義、人種主義および排除、4) 宗教的分派主義、アイデンティティ政治、根本主義、5) 軍事主義と平和と、5つのテーマで選ばれた。このような世界社会フォーラムのテーマ設定は、オルターナティブなグローバル化運動から提起されている争点を諸領域別に分ける方式である。討論会はこうした大テーマのもとで組織委員会が企画したコンファレンスと、参加者が自発的に組織した小規模なワークショップに分けて行われた。

しかし、領域別に分けられて進められる各種のコンファレンスとワークショップは、互いに関連性をもたず破片化しかねないだけでなく、議論のレベルも単に互いの立場を確認する程度にとどまり、討論のための討論に過ぎないという評価が支配的である。会を重ねるにつれてフォーラムの規模が大きくなり、こうした現象はより顕著になった。さらに、大規模の企画コンファレンスと小規模のワークショップが同じ時間帯に配置されるケースが多いため、参加者が組織する小規模のワークショップが比較的注目されなかった。世界社会フォーラムはこうした問題点を改善すべく、第5回世界社会フォーラムからは新しい方法論<sup>18</sup>を導入し、フォーラムの精神であるフォーラム参加団体の自律性を活かしつつも、討論を深め、共同実践の決議が可能な構造へ転換した。

たとえば、第5回世界社会フォーラムでは、組織委員会が11のテーマ領域を決め、各領域で討論を通じた共同実践決議として議論をまとめるように奨励する一方、組織委員会が企画するコンファレンスをなくし、すべての討論会を参加団体が自発的に組織する方式を採択した。フォーラムの空間もこうした趣旨にあうように構成され、イベント場全体が11に分かれ、テーマ領域ごとに1つの区画が割り当てられた。また、登録されたイベント以外の即興的な討論もできるように、別途のテントを至る所に設けた (Mi-Gyoung Ryu, 2005)。2ヶ月間全世界の運動団体を対象にしたアンケート調査に基づいて選ばれた11のテーマも、以前の形式的な区分とは異なり、具体的な実践決議のできる限定したテーマで構成されており、具体的には次のようである。1) 地球と民衆の公共財の確保と防衛—商品化とトラン

---

<sup>18</sup> 方法論 (methodology) とは、世界社会フォーラムのプロセスの構造を作り上げ、進行する方式を総称して表した言葉として使われている。

スナショナル的な支配に対する代案、2) 芸術と創造—民衆の抵抗文化の建設、3) コミュニケーション—対抗ヘゲモニーの実践、権利および代案、4) 多様性、多数およびアイデンティティの保護、5) 正義と平等な世界のための人権と尊厳、6) 民衆のための民衆による経済主権—新自由主義的資本主義に対抗して、7) 倫理、宇宙的な展望および精神世界—新しい世界のための抵抗と挑戦、8) 社会闘争と民主的代案—新自由主義的支配に反対して、9) 平和と非軍事化および反戦・自由貿易・外債に反対する闘争、10) 自立主義的思考、再専有および知識と技術の社会化、11) 国際的な民主秩序と、民衆統合の建設への志向。また、このような領域別のテーマと、それとは別途に全体を合わせる横断的なテーマとして、1) 社会の解放と、政治的闘争のレベル、2) 家父長的な資本主義に抵抗する闘争、3) 人種主義と様々な形態のネポティズムに抵抗する闘争、4) 性、5) 多様性などが選ばれた。

世界社会フォーラムは初期には各国の社会運動団体が 1 か所に集まり見解を共有するという点だけでも、各国の社会運動の連帯において象徴的な意味が大きかった。そのために、新しい国際主義の展望が出されたりした。しかし、次第に規模が大きくなり、世界的に拡大することで、世界社会フォーラムも一種のマンネリズムに陥っていると批判が出されはじめた。討論会の形式と内容が「討論クラブ」、「市民団体のトークショ」、「デパート式討論」といった表現が表すように、破片化した様子を見せたのも事実である。第 5 回世界社会フォーラムから見えはじめた「方法論」の変化は批判に対する対応でもあり、世界社会フォーラムの発展の様子でもある。ただ、世界社会フォーラムの空間の性格により、破片性を完全に克服することはできないが、討論をいかに組織するかにより改善の余地はあるだろう。

最も重要な問題として、「もう 1 つの世界」をどう構成するかという本質的な問題に対する公開的な議論が足りないという指摘 1 (Teivainen,2004:128) は、十分考慮に値する。この問題が提起されると、過去にそうであったように、革命と改革、社会主義、国家のような争点をめぐる理論的な闘争が再現する可能性が高い。世界社会フォーラムにおいて、このような次元の論争が本格化していないのは、こうした論争が非生産的であるという暗黙の同意があるからかもしれない。実際、世界社会フォーラムが現れたのも、理論的な答えを探すためではなく、新自由主義的支配に対する抵抗という行動の緊急性のためであるといえる。したがって、世界社会フォーラムに多様な社会運動が結合しているからでもあるが、開かれた空間としてのフォーラムの本質的な性格のためにも、「もう 1 つの世界」に対する理論的次元の論争をすることは適切でないように見える。むしろサントス (Santos) が提案する、行動における「脱両極化した多元性」(depolarized pluralities) が、世界社会フォーラムの戦略として適切であると考えられる (Santos, 2006:166)。

サントスは理論的な極端主義と、具体的な政治的実践の乖離が、20 世紀左派運動の最も大きな問題点であると批判しながら、世界社会フォーラムという形式の運動がこうした乖離が作りあげた空白を埋める、意味のある新しい運動であると積極的に評価する。彼は世界社会フォーラムを脱両極化した多元性の概念としてとらえているが、それは分離と差異

だけでなく、統一と類似性を促す討論の脈絡を創出し、「行動の統一性」を模索できるようにする。彼のいう脱両極化した多元性とは、理論的な闘争を通じた総合性を目指すというよりは、差異を認める共同の行動を模索することがポイントである。したがって、革命と改革、社会主義、国家のような理論的な争点は、「非生産的」な争点である。彼は、代わりに「生産的」争点として4つの例を提示する。1) 同盟または敵としての国家：この争点は国家の適合性の問題を抽象的なレベルで扱わないために生産的である。2) 地域的、国家的、地球的闘争：あるレベルの集団行動に優先権を付与するかについて広範囲な論争を繰り広げているが、こうした論争は生産的である。3) 制度的行動、直接行動、市民的不服従：改革と革命のうちでの選択とは違って、この争点は集団行動の実践的な脈絡において議論される点で生産的である。4) 平等のための闘争と差異の尊重のための闘争：脱両極化した多元性のためには、平等とともに差異の認識が社会的解放において重要な原理としてみなされるべきである(Santos, 2006:173-176)。

## 2) フォーラムの世界的な拡散

世界社会フォーラムのフォーラムという新しい形式の運動方式は、世界各地および国家に、類似な方式のフォーラムを促す重要な契機となった。以前にも、地域および国家レベルにおいて運動団体が連帯する様々な方式の努力があったが、2001年世界社会フォーラム以降にもフォーラムという形式が重要な方式として根付いたようである。

最も早くはじまり、定例的なフォーラムとして定着した地域フォーラムは、ヨーロッパ社会フォーラムである。2002年イタリア・フローレンスで初めて開催されたヨーロッパ社会フォーラムは、2003年パリ、2004年ロンドン、2006年アテネ、2008年スウェーデンのマルメで開かれた。最初は毎年開催されたが、2006年からは2年に一回、集中世界社会フォーラムがない年に開かれる。アフリカでは、2003年1月にエチオピア・アディスアベバでアフリカ社会フォーラムが開かれており、アジアでは2003年1月にインド・ハイデラバードでアジア社会フォーラムが開催された。アメリカでは、アメリカ社会フォーラムが2004年3月にエクアドル・キトで開かれており、その他に汎アマゾン地域社会フォーラムが2002年にブラジル・ベレンで開催されて以来、何回も開かれており、カリブ海社会フォーラムが2006年フランス領・マルティニークで開かれた。地域フォーラムは、従来から国際連帯運動が強く、世界社会フォーラムで主流を占めているヨーロッパとラテンアメリカで活発である一方、アジアやアフリカでは世界社会フォーラムにより促されたものの、運動の力量が弱く、まだ一回性のイベントにとどまっている。

国家レベルの社会フォーラムは世界社会フォーラム以来、一般的な現象となりつつある。韓国でも2002年に第1回韓国社会フォーラムが開かれてから、毎年の夏に社会運動団体が集まり、懸案問題を議論し、互いの違う経験を共有する場になっている。<sup>19</sup> 地域別・国

---

<sup>19</sup> 近年これまでのフォーラムが分散的、学術的な方向になっており、共通の運動課題について深い討論が行えないという批判が提起されたことで、学術団体よりは運動団体が主導

別フォーラム以外にも新自由主義フォーラム、麻薬・人権・民主主義フォーラム、世界教育フォーラムのようなテーマ別フォーラム、世界議員フォーラムと世界青年フォーラムのような主体別フォーラムも、世界社会フォーラム以降拡散している。

こうした地域別、国家別、部門別、テーマ別フォーラムは、世界社会フォーラムのバナーを使わない場合もあるが、多くは世界社会フォーラムの半公式的な日程の一部として構成される。多様な社会フォーラムは、1つの過程であると同時に、それ自体が1つの「運動」として拡散しているのである。こうした点から、世界社会フォーラムは毎年開かれる。年間行事以上の意味をもち、それが世界各地と国家の社会運動に及ぼす影響は相当大きいといえる。

地域および国家フォーラムの拡散とともに、世界社会フォーラム国際委員会もフォーラムの拡大に積極的に取り組んでいる。国際委員会が2006年第6回世界社会フォーラムを「多中心型フォーラム」として分散開催方式を採択したのは、フォーラムの世界的な拡散の努力の一環であるといえる。<sup>20</sup> 2006年世界社会フォーラムは1月にアフリカ・マリのバマコとベネズエラ・カラカスで開催されており、パキスタン・カラチでは地震の影響で日程が遅れて3月に開かれた。公式的に世界社会フォーラムという名前は掲げてないが、同じ年の5月にギリシャ・アテネでヨーロッパ社会フォーラムが開かれ、主要大陸で分散開催されたことになった。分散開催されたフォーラムは、その規模と内容において各大陸の運動の力量と議題が反映された。1万人あまりが参加したバマコフォーラムでは内戦と地域紛争の終息、女性の早婚問題といったアフリカ特有の問題が強調された。10万人あまりが参加したカラカスフォーラムでは、南米地域に相次いで登場した左派政権と社会運動の関係が重要なテーマとして取り上げられた。約3万人が参加したカラチフォーラムでは、帝国主義と軍事主義、そして平和運動が重要な議題であった。このように開催地が分散されたことで、これまで参加することが難しかった様々な地域の民衆が世界社会フォーラムに参加でき、これにより以前には活発に提起されなかった各地域と大陸の固有の議題が議論に中心になり得た。<sup>21</sup> そして何よりも分散開催の効果は、アフリカやアジアなど相対的に社会

---

し、集中的な討論ができる方式へとフォーラムを組織する変化があった。

<sup>20</sup> 第6回フォーラムで分散開催方式を採択したのには他の理由もある。地域別・国別フォーラムが多数開催されている状況において、毎年世界社会フォーラムを集中的に開催することに伴う費用と効果の問題が国際委員会の内部で提起された。世界女性行進やビア・カンペシーナ (Via Campesina) といった大衆運動を優先する側では、毎年開催される多様な社会フォーラムが現場での組織化や闘争において束縛になっていると指摘し、世界社会フォーラムを2年または3年に一度開催することを提案した。これに対して主にNGO側では、世界社会フォーラムが世界経済フォーラムと同様の時期に毎年開催されなければ、「政治的空白」が生じ、それはまさに世界社会フォーラムの敗北を意味することであるために、毎年開催すべきであると反論した。こうした異議のなかで世界社会フォーラムの周期については結論を下せないまま、2006年世界社会フォーラムを様々な地域で分散開催するという仲裁案が示された (So-Hee Jeon, 2005)。後ほど国際委員会は集中世界社会フォーラムを2年に一度開催することで方向を決めた。

<sup>21</sup> [http://www.forumsocialmundial.org.br/main.php?id\\_menu=14\\_6&cd\\_language=2](http://www.forumsocialmundial.org.br/main.php?id_menu=14_6&cd_language=2)

運動が立ち遅れた地域において世界社会フォーラムが拡散したことである。

### 3) 世界社会運動総会とグローバルな共同行動

世界社会フォーラムは憲章に規定されているように、一次的な討論の空間であるが、参加主体が自律的に作り上げていく空間でもある。空間としての世界社会フォーラム自体が、特定の立場・意見を発表したり、指示したりせずに、いかなる人も世界社会フォーラムを代表すると自認することはできないが、参加者の行動方式もまた制限されていない。フォーラムのこのような性格は、参加者にとって単なる議論にとどまらず、決議や共同行動を可能にするきっかけを与える。「世界社会運動総会」(International Social Movement Assembly)と「世界社会運動ネットワーク」(International Social Movement Network)は、フォーラムを企画した人々とは別に、フォーラムに参加した運動団体が自発的に組織したものであった<sup>22</sup>。

第1回世界社会フォーラムで労働組合、農民運動、女性運動といった大衆運動を目指す組織は、フォーラムの最後の日には新自由主義的グローバル化に関する主要論点に対する基本的立場と活動リストを整えようと、「動員のための呼びかけ文」(Call for Mobilization)を作成し、世界社会運動総会を開くと発表した。<sup>23</sup> 以来、第2回世界社会フォーラムにおいても社会運動総会と呼びかけ文の発表があったし、第3回世界社会フォーラムに至っては呼びかけ文の発表とともに、社会運動間のこうした連携が世界社会フォーラムの開かれる場所や期間に限られないようにするという趣旨で、常設化した世界社会運動ネットワークが結成された。第1回世界社会フォーラムの呼びかけ文には様々なフォーラム参加者の主な要求として、人種差別、エスニック・グループの虐殺、家父長制、生態系破壊に対する反対、外債の帳消しと賠償、金融市場の統制と租税回避地(tax haven)の廃止、資源と公共財の私有化やFTAに対する反対、労働基本権の保障、民主的な土地改革、生命に関する特許権の廃止、軍備競争と武器取引の中止、外国への軍事介入の反対などが述べられた。第2回世界社会フォーラムの呼びかけ文は以前より具体化した提案が提出された。そこには、国際金融貿易機構の転換、金融取引の課税、第三世界の外債の帳消し、農業改革の転換、水の商品化と私有化に対する反対、超国籍企業に対する監視などが含まれた。<sup>24</sup> 第3回フォ

---

<sup>22</sup> 世界社会フォーラムの空間は、新しい社会運動のネットワークが構成される媒介にもなる。たとえば、「正義のある労働」(Jobs with Justice)が主導し、これまでの反戦・反新自由主義闘争に基づいて、2003年世界社会フォーラムをきっかけとして構成した「草の根のグローバルな正義」(Grassroots Global Justice)は、各国の労働運動団体と、各国の労働運動団体が2007年世界社会フォーラムをきっかけに構成した「労働者とグローバル化のネットワーク」が代表なケースである(So-Hee Jeon:2003、Chang-Keun Lee:2009)。

<sup>23</sup> 第1回世界社会フォーラムに参加した団体のうち、社会運動総会を主導したのは、MST、CUT、CGIL(イタリア労働者総連盟:Confederazione Generale Italiana del Lavoro)、ATTAC、世界女性行進(World March of Women)、Focus on Global South、ジュビリー2000(Jubilee2000)など、7つの団体であった。

<sup>24</sup> 社会運動総会と呼びかけ文の発表が人々にフォーラムそのもののイベントのように見える誤解を招くという憂慮に対して、総会組織者はフォーラムの名前としてではなく、フォ

ーラムでも類似の内容の呼びかけ文が発表されており、ムンバイで開かれた第4回フォーラムでは、特に国際反戦総会が開かれ、アメリカのイラク占領反対と国際共同行動の日に対する決議文を採択した。

2005年第5回世界社会フォーラムは、世界社会運動総会がフォーラムで一層重要となるきっかけとなった。上記したように、第5回フォーラムは組織委員会の大規模な企画コンファレンスがなく、参加者の自発的なワークショップだけで進められており、組織委員会においても討論から行動決議へつながる方式の議論を奨励したが、これまで世界社会運動総会が行ってきた討論の方式がまさにそれであったためである。「世界社会運動ネットワーク」を媒介に持続的に連携を形成してきた様々な社会運動は、「社会闘争と民主的代案—新自由主義的支配の反対」、「平和・非軍事化と反戦闘争、自由貿易反対、外債反対闘争」、「米軍基地反対キャンペーン」、「パレスチナ戦略総会」、「自由貿易反対キャンペーン」、といったテーマ別会議と、「世界女性行進総会」、「持たざる者（ホームレス、ピケテロス、ダークリット、未登録労働者など）の運動」といった部門別会議、そして「アジア社会運動会議」、「南米—ヨーロッパ共同行動計画をつくるための会議」といった地域別会議など、多次元な討論会が世界社会運動ネットワークの企画で開かれた。「世界社会運動総会」はこうした討論会の前に反戦運動と、オルターナティブなグローバル化運動に取り組む様々な勢力に至急かつ重要な議題が何かを確かめる場として、世界社会フォーラムのスタートと同時に1回開催されており、各部門別、テーマ別、地域別会議の決議事項を収斂し、2005年の共同行動計画を確認する場として世界社会フォーラムを締めくくる際にももう一回開かれた。また、「世界社会運動ネットワーク」は「世界社会運動総会」の延長線上で、最後の日に「FTAA（米州自由貿易地域：Free Trade Area of the Americas）・自由貿易・戦争・ブッシュ政府に反対する行進」を組織した。<sup>25</sup>

多中心型フォーラムとして開かれた2006年の世界社会フォーラムにおいても、カラカスフォーラムの最後の日に世界社会運動総会が開かれ、「アメリカによるイラク戦争の中止」、「イスラエルによるパレスチナ占領の中止」、「大量殺傷武器や核の使用の中止」、「ベネズエラ、キューバなどアメリカの軍事的介入に抵抗する民衆との連帯の強化」、「ドーハ開発アジェンダ（Doha Development Agenda: DDA）の交渉の阻止」、「南半球の外債を直ちに条件なしに帳消しすること」などを主な議題とする呼びかけ文を発表した。2007年ナイロビ世界社会フォーラムと、2009年ベレン世界社会フォーラムにおいても、同様の方式の世界社

---

ーラムを利用するだけであると主張する（Pil-Su Im, 2003）。

<sup>25</sup> 第5回世界社会フォーラムの世界社会運動総会の呼びかけ文は、各部門別・テーマ別・地域別会議の結果が反映され、アメリカのイラクに対する占領の終結と諸国に対する軍事的脅威の中止、両国間・他国間の自由貿易協定およびWTO交渉の反対、土地改革、生命特許の反対、遺伝子組換え食品の拒否、水・教育・保険医療の私有化の反対など、25におよぶ闘争議題を盛り込んだ。また、「戦争、新自由主義、搾取と排除に反対する闘争を組織しよう！もう一つの世界は可能だ！」というタイトルの世界社会運動の呼びかけ文以外にも「アジア社会運動の宣言」、「国際反戦総会の呼びかけ」といった地域別・テーマ別会議で採択された宣言も別途配布された（Mi-Gyoung Ryu, 2005）。

会運動総会と呼びかけ文の発表が行われた。

2005 年以降、世界社会フォーラムにおいて、世界社会運動総会がフォーラムの討論会を組織する重要な役割を担うこととなったのは、世界社会フォーラムの「討論のための空間」という当初の性格が変化し、それ自体が1つの「運動」になっていることを表すものであるといえる。討論の参加の主体が、世界社会フォーラムが当初もっていた「自由な空間」を媒介に、それを積極的に活用した結果である。

世界社会運動総会と世界社会運動ネットワークは、討論を通じた行動決議から一歩進み、グローバルな共同行動を組織する中心的な単位としての役割を果たしている。2001 年のイタリア・ジェノバ G8 サミット反対デモ、2003 年の 2・15 国際反戦共同行動と、メキシコ・カンクン第 5 回 WTO 閣僚会議阻止闘争、2004 年のイラク戦争開戦 1 周年 3・20 国際反戦共同行動などは、「世界社会運動総会」により全世界的なレベルで組織された代表的な共同行動である。2005 年には世界社会運動総会の決議により、イラク戦争開始 2 周年に際して、国際反戦共同行動（3 月 19～20 日）、「新自由主義と家父長制、排除と差別に反対する世界女性行進」（3 月 8 日～10 月 17 日）、スコットランド・エディンバラ G8 サミット反対闘争（7 月 2～8 日）、香港第 6 回 WTO 閣僚会議阻止闘争（12 月 13～18 日）などの共同行動が行われた（Mi-Gyoung Ryu, 2005）。2006 年カラカス世界社会運動総会においては、国際反戦共同行動（3 月 18～19 日）、ジュネーブ WTO 一般理事会対抗行動（5 月）、ロシア・サンクトペテルブルク G8 サミット反対闘争（6 月）、IMF－世界銀行年次総会反対行動（9 月）などが世界社会運動総会で決議された（Su Yeol, 2007）。こうした国際的共同行動は、2003 年世界社会運動総会で構成された世界社会運動ネットワークが、毎年新自由主義的国際機構の行事に合わせてカレンダーを作り、全世界的レベルにおける国際的動員を担当してきた。

世界社会フォーラムの開催されなかった 2008 年には、国際委員会が世界社会フォーラムの名前で、ダボスフォーラムが開かれる 1 月 26 日を「グローバル行動日」とし、戦争と新自由主義、人種主義、家父長制などに対抗する多様な行動を組織した。「1・26 グローバル行動日の組織委員会」は 1 月 22 日に全地球共同記者会見をスタートに、「FTA、貧困、戦争、差別のない世界のために」のもとで、1・26 週間イベントを行った。フィリピン、インドネシア、スリランカ、イラク、パレスチナから、メキシコ、ブラジル、ベネズエラ、フランス、ベルギー、イタリア、スイス、アメリカなど世界 82 カ国、100 余りの都市で 705 の行動が行われた。韓国においては、2007 年 9 月に社会運動フォーラムの社会運動総会で 1・26 グローバル行動日を国内で進めることにし、30 余りの労働・社会団体の参加した「2008 年世界社会フォーラム：1・26 グローバル行動日の組織委員会」を構成し、行事を準備した。同じ日の午後、ソウル駅で「もう 1 つの世界に向けて共に闘争しよう！ FTA、戦争、貧困、差別のない世界のために」というテーマで集会行ったり、ソウルの街をデモ行進したりした。

これまで世界社会フォーラムの公式機構とは関連のない世界社会運動総会と世界社会運動ネットワークが行ってきた国際的な共同行動の組織を、世界社会フォーラムの国際委員

会が直接担当するようになったのは、世界社会フォーラムの性格に重要な変化が起きたことを意味する。現在は、2010年の分散開始を控えて、世界社会フォーラムの国際委員会が全世界的危機の問題を争点に、各地域と国家のフォーラムが「共同のアイデンティティ」をもって、「世界社会フォーラム 2010年カレンダー」の一環として進めることを呼びかけている。<sup>26</sup> 世界社会フォーラムが参加団体の要求に応じて、単なる空間ではなく、運動の組織者であり、ゆえに1つの行為者へと変化したのである。

#### 4. 結び

世界社会フォーラムは、20世紀末から全地球を支配している新自由主義的グローバル化に抵抗する新しい形態の国際的な社会運動として21世紀初頭に現れた。世界社会フォーラムは、20世紀の様々な社会運動の流れが合流することで、最初は民主的な議論と経験を共有するための空間としてはじまったが、空間の開かれた性格により参加者がその性格を変化させてきた。本稿では、9年間の世界社会フォーラムのプロセスを動的な観点から組織と戦略に焦点を当てて分析した。

世界社会フォーラムは、基本的に討論の空間であるために、一般の組織とはその性格が異なる。それにより、世界社会フォーラムが「空間」か「運動」かという組織形式をめぐる論争があった。世界社会フォーラムは憲章で規定している通り、本質的には空間であることは間違いないが、実践的にはフォーラムの空間のなかで様々な組織の多様な活動を通じて1つの運動として発展しているのである。したがって、世界社会フォーラムが、空間か運動かという問題を二者択一の問題として概念的にアプローチすることは好ましくない。空間としてのフォーラムがもつ長所を活かしつつ、どうやって新自由主義反対とオルタナティブなグローバル化というフォーラムの基本目標に近づけられる、多様な戦略を駆使するかが重要な問題である。世界社会フォーラムにおいて一般的な意味での組織は国際委員会である。2003年6月国際委員会の会議においては国際委員会の地位をめぐる重要な変化が現れた。それにより、ブラジル組織委員会の国際的な正当性を付与するという象徴的な機構という立場から、フォーラムプロセスに対する最高意思決定機構としての立場を確実にしている。また、フォーラムの開催されない期間中は6つの小委員会が活動している。一方、国際委員会の構成における代表性の問題や、運営方式および役割に対する批判がある。しかし、世界社会フォーラムは、基本的に参加団体が作り上げていく運動空間であるために、形式的には国際委員会に権力が集中しているとしても、参加団体によって統制されていかざるをえないものである。むしろ鍵となるのは、国際委員会が参加団体の意思を反映し、柔軟な戦略を駆使することであろう。

世界社会フォーラムの戦略のポイントは、多様な見解に基づく議論と、経験の共有である。近代世界が国民国家により仕切られるものであり、また社会運動も基本的には国民国家の単位によって形成される。そのために、各国の社会運動の経験を討論し、共有できる

---

<sup>26</sup> <http://www.forumsocialmundial.org.br/download/IC%20CALL%202010.pdf>

ということだけをもってしても、世界社会フォーラムのもつ意味は大きいといえる。世界社会フォーラムが維持され、生命力をもつためには、軽率に総合性を指向するよりは、「脱両極化した多元性」(Santos,2006)に基づいた生産的な討論が重要である。世界社会フォーラムは、回を重ねるにつれ、討論の空間から一歩進み、全地球的な共同行動を決議し、実践する媒介として根付いた。最初はフォーラムに参加したいくつの団体が自発的に「世界社会運動総会」を開き、共同決議文を発表した。また、フォーラムの公式機構ではない「世界社会運動ネットワーク」が共同行動を組織する役割を担い、国際委員会はこれに距離をおいた。しかし、国際委員会は、2005年世界社会フォーラムを契機に方法論を変え、討論—決議—共同行動へとつながる討論を奨励しており、2008年には「グローバル行動日」の組織に取り組むなど、柔軟な戦略を駆使している。

2001年の世界社会フォーラム以来、「フォーラム」は、すでに世界の各地域、国家、そして部門運動において、普遍的な現象となりつつある。こうした点からも、世界社会フォーラムが世界社会運動においてもつ意味は大きいといえる。しかし、フォーラムという形式は、本質的に空間であるために、フォーラムそのものよりは、参加者の戦略的選択がその性格を左右することはいうまでもない。ただ、世界社会フォーラムをはじめとする様々なフォーラムは、社会運動を代表することはできないかもしれないが、21世紀の社会運動の内容を豊かにし、オルタナティブな世界へと進むための重要な媒介となるだろう。

<参考文献>

・韓国語

- Chang-Keun Lee(2009)「世界的危機に立ち向かう労働者運動—2009年世界社会フォーラムの参加後記」、『月刊社会運動』、通巻87巻、社会進歩連帯
- Ji-Young Jung (2004)「世界社会フォーラムの展望と運動の課題」、『月刊社会運動』、通巻43巻、社会進歩連帯
- Mi-Gyoung Ryu(2005)「誰が世界社会運動を動かすのか?—第5回世界社会フォーラムが残したもの」、『月刊社会運動』、通巻53巻、社会進歩連帯。
- Mi-Gyoung Ryu(2006)「戦争と新自由主義に立ち向かう連帯を拡張しよう!—多中心型世界社会フォーラムからみるオルターナティブなグローバル化運動の課題」、『月刊社会運動』、通巻62巻、社会進歩連帯
- Pil-Su Im (2003)「グローバル化と世界社会運動—オルターナティブなグローバル化運動と世界社会フォーラムを中心に」、『月刊社会運動』通巻37巻、社会進歩連帯
- So-Hee Jeon(2003)「世界社会フォーラムの‘成長痛’」、『月刊社会運動』通巻37巻、社会進歩連帯
- So-Hee Jeon (2005)「世界社会フォーラムを本当に地球的反省・反グローバル化運動につくのか?—世界社会フォーラムのアイデンティティと展望をめぐる国際委員会の争点」、『月刊社会運動』、通巻53巻、社会進歩連帯
- Su Yeol(2007)「世界社会フォーラムプロセスの拡張、そして‘1・26 グローバル行動日’」、『月刊社会運動』、通巻79巻、社会進歩連帯
- Suk-Ki Kong (2007)「地球民主主義とトランスナショナル的社会運動:世界社会フォーラムの事例を中心に」、2007年後期社会学大会発表論文。

・英語

- Calinicos, Alex and Ninehanm, Chris (2007). “At an Impasse? Anti-capitalism and social forums today”, *International Socialism*, issue 115.
- Cassen, Bernard, 2005. “The World Social Forum: Where Do We Stand and Where Are We Going?”, *Global Civil Society Yearbook 2005/6*.
- Ching, Pao-yu, 2004. “Critical views of the world social forum: From Mumbai resistance”, *Inter-Asia Cultural Studies*, vol.5, no2.
- De Angelis, Massimo, 2000. “Globalization, New Internationalism and the Zapatistas”. *Capital and Class*, issue 70.
- Della Porta, Donatella et al., 2006. *Globalization from Below: Transnational Activists and Protest Networks*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- James, P.J.,2003. “The World Social Forums ‘Many Alternative’ to Globalization”. Sen, Jai et al. *The*

- World Social Forum: Challenging Empires*, New Delhi: Veveka.
- Klein, Naomi, 2002. *Fences and Windows: Dispatches from the Front Lines of the Globalization Debate*. London: Flamingo.
- Smith, Jackie et al., 2008. *Global Democracy and World Social Forums*, London: Paradigm.
- Waterman, Peter, 2004. "The Global Justice and Solidarity Movement and the World Social Forum: a Backgrounder". Sen, Jai et al. *The World Social Forum: Challenging Empires*, New Delhi: Veveka.
- Whitaker, Chico, 2004. "The World Social Forum as Open Space", Sen, Jai et al. *The World Social Forum: Challenging Empires*. New Delhi: Veveka.
- Whitaker, Chico, 2005. "The World Social Forum: Where Do We Stand and Where Are We Going?", *Global Civil Society Yearbook 2005/6*.
- Whitaker, Chico, 2000. "World Social Forum: Origins and Aims". [http://www2.forumsocialmundial.org.br/dinamic.php?pagina=origem\\_fs\\_ing](http://www2.forumsocialmundial.org.br/dinamic.php?pagina=origem_fs_ing).
- Santos, Boaventural de Sousa, 2006. *The Rise of Global Left: World Social Forum and Beyond*, Zed Books.
- Teivainen, Teivo, 2004. "The World Social Forum: Arena or Actor?", Sen, Jai et al. *The World Social Forum: Challenging Empires*. New Delhi: Viveka.
- Sen, Jai et al. 2004. *The World Social Forum: Challenging Empires*, New Delhi: Veveka.